

「天文学の国立研」に関するアンケートの結果について

海 部 宣 男*

はじめに

東京天文台改組準備調査室の共同利用ワーキング・グループは、62年8月から9月にかけて、東京天文台・緯度観測所・名大空電研第三部門の合併改組による天文学の国立大学共同利用研究所設立に関し、天文学および関連分野の研究者の意向調査を実施した。その結果、アンケート送付総数約 980 に対し、397 名 (40%) という多くの方々から熱意ある回答を寄せていただき、今後の新研究所づくりに貴重な資料を得ることができた。アンケートの実施に全面的に協力いただいた宇電懇の田原、光天連の小暮両氏、データ解析に多大の御世話をかけた井上志津代さんはじめ野辺山宇宙電波観測所のスタッフ、それにていねいな回答をよせていただいた皆様に、まず御礼を申しあげたい。

この種の意向調査は、本来はもっと早い時期に実施すべきものであろう。諸般の事情があったとはいえ、実施のタイミングがくれ、改組についての 63 年度概算要求における基本構想に広く研究者の意見を反映させる機会を失した点については、おわびしなければならないと思う。しかし本調査では、新しい天文学の国立研組織の具体化、共同利用運営の方向、また今後の研究所と日本の天文学研究のありかたなどを考える上で有用な意向調査とすることに重点をおき、幸い多くの熱心な回答を得てある程度それに成功し得たように思われる。調査結果の全データは、近いうちにパンフレットの形で公開するべく準備中であるが、ここでは天文月報の紙面をお借りして、全体的な特徴、主な結果の概略を紹介し、また外部ユーザーからみた調査結果についてのコメントを、田原、小暮、田中の三氏からいただくことにした。

アンケートの回答者について

アンケートは、日本天文学会特別会員 (約 610)、緯度観測所を通じて (約 150)、天文大学院生の会を通じて (約 100)、各研究機関に送付 (約 80)、東京天文台職員 (約 40)、以上合計 980 部を配付した。重複があるため、実際にはこれよりやや少ないと思われる。

これに対し、9月10日までに送付された回答は、総数 397 人で、その内訳は表 1 のとおりである (内訳について無回答を除く)。

とりわけ当事者以外の各大学や、大学院生層から多く

表 1 回答者内訳

(所属別)	(人)	(身分別)	(人)
東京天文台	49	教育職 (大学)	186
緯度観測所	36	研究職	68
大学	223	技官	21
上記以外の研究所	37	大学院生, OD	81
その他	47	その他	37
(年齢別)	(人)	(研究分野別 (2つまで))	(人)
20 代	87	光学・赤外	90 + 2 = 92
30 代	106	太陽物理	30 + 5 = 35
40 代	107	電波天文	50 + 18 = 68
50 代	52	位置・力学	37 + 11 = 48
60 代以上	40	地球回転	20 + 25 = 45
		理論	84 + 27 = 111
		機器開発	13 + 67 = 80
		その他	48 + 37 = 85

の解答が寄せられたことは、本調査の目的に照らして有難いことであった。

全体的特徴

回答全体をみて、天文学の国立研究所への改組に対する関心が極めて高く、また期待感も強いことがわかる。特に新研究所に強い期待が集まったのは、第一に大型観測装置の建設 (非常に期待する 236, ある程度期待する 124, 合計で 360 (91%)), ついでほぼ同じレベルで観測機器の共同開発, 共同研究の推進, 共同利用に関するサービス (それぞれ合計で約 300 (76%) づつ) である。その一方で、不安感もある。新研究所に対する不安として、金と人の集中化によるモノポリーへの不安が圧倒的に多くあげられた (非常に不安 123, ある程度不安 149, 合計 272 (69%))。図 2 に示したように、他大学研究者にこの不安が強いのはうなずけることで、人事交流の必要性 (後述) に対する極めて高い関心も、これと直接関わっている。今後の新研究所の運営にあたって、最大の問題の 1 つである。これについて「不安」なのは、管理運営が厳しくなる、運営への実質参加、研究の自由、の順になっている (図 2 参照)。

このような不安はあるものの、全体としては「構想素案」に示された改組の基本方針への支持は高い (大いに賛成 36, 賛成 239, 合計 275 (69%))。一方、少なからぬ反対意見もあるということも、考慮されなければならない (まったく賛成できない 7, あまり賛成できない 59, 合計 66 (17%))。図 1 に、回答者の所属別、年齢

* 東京天文台改組準備調査室共同利用ワーキング・グループ
東京天文台野辺山宇宙電波観測所

図 1 現在考えられている「新研究所」への改組の基本方針について

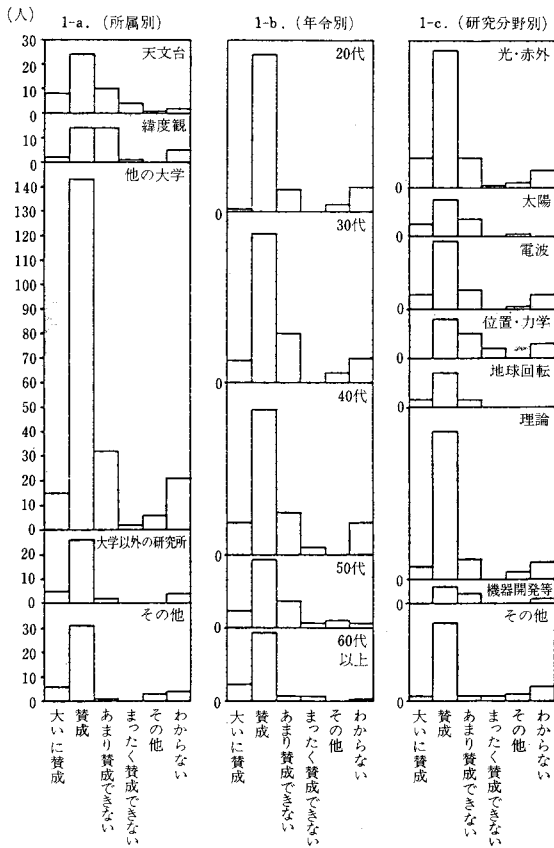


図 2 新研究所での不安

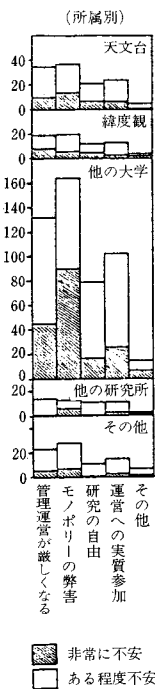
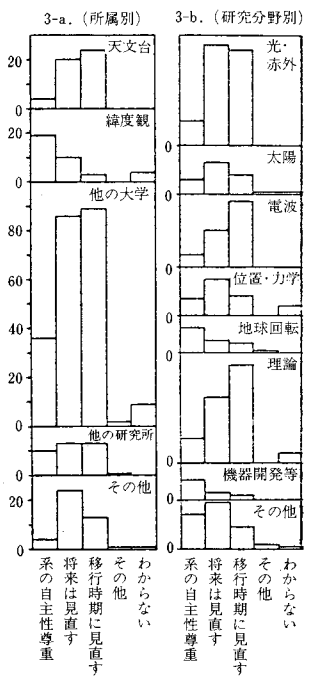


図 3 研究系・研究施設の運営・自主性



別, 研究分野別[※]の回答分布を示した。それぞれについて際だちがいはないが, 所属では緯度観測所, 分野では位置・力学分野で, 他にくらべ否定的な回答が多い。改組に至る過程や研究スタイル (共同利用を必ずしも必要としない, といった) を反映していると思われる。回答数は少ないが, 技術者層にも同様な傾向がみてとれる。技術者の待遇に対する不安感からであろう。

冒頭の自由記述欄には, 103 人が長短さまざまな, 熱心な記述を寄せられた。意見は多様だが, 大きくわけてみると, ●フレキシブルで開かれた研究所を(28), ●思いきった改革をせよ(11), ●情報が足りない・アンケートに不満(10), ●人事(人事交流)の重要性(6), ●天文学の普及活動を(5), ●緯度観測所の位置づけについて(4), ●技術・技官の重視(4), ●東大との関係を見直せ(4), ●宇宙開発との関係重視(3), ●木曾観測所の東大残留反対(2), ●院生の運営参加を(2), などである。

(※注) 回答者の研究分野としては, 2つ答えているうち, 最初の1つによって分類した。2つめを答えた人は合計192人と少なく, またこの質問では最も関係の深い分野を最初にあげると判断したからである。

このような分類ではとうてい表せない貴重な意見も多々いただいたが, 近いうちにパンフレットにまとめた。

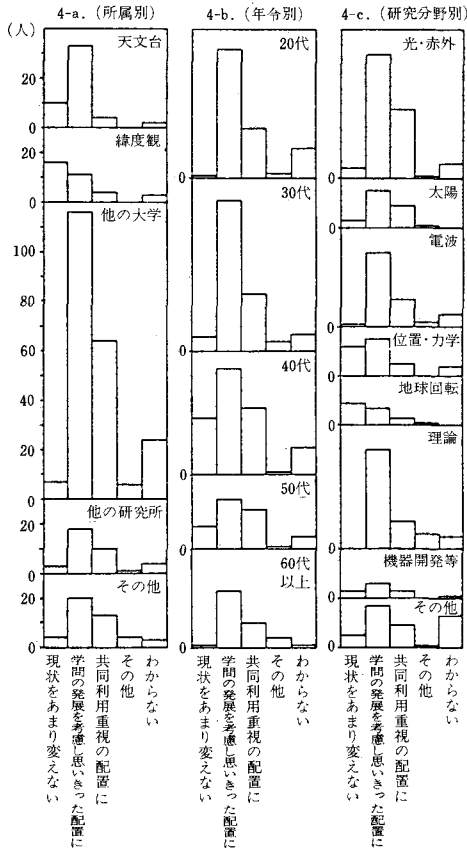
以下に, 各項目についての結果の主な点をピックアップするとともに, 回答者別の回答分布図をあげる。このような改組において, 賛否さまざまな意見が表明されるのは当然であり, それらをふまえて, 自主的改革が進められることが望まれる。アンケートの結果が, 今後の新研究所づくりに充分生かされ, 活力あふれる共同研究の場が開けるよう, 期待し, 努力したい。

問題別の回答の概略

[問 2] 改組の基本方針について

1. 改組についての程度知っているか
 - ・良く知っている 69
 - ・大体知っている 187
 - ・少しは知っている 100
 - ・ほとんど知らない 33
2. 改組に関する情報源
 - ・当事者は関連機関, 他は研究者組織からが多い。
4. 外部の研究者の意向を汲む努力
 - ・ある程度している 173
 - ・あまりしていない 96
 - ・精一杯努力している 34
 - ・努力がみられない 24
5. 改組の基本方針への賛否 (図 1 参照)

図4 系や部門における定員配置



- ・大いに賛成 36
- ・賛成 239
- ・全く反対 7
- ・あまり賛成できない 59

7. 新研究所に対する不安 (非常に不安+ある程度不安)

- ・モノポリーの弊害 272
 - ・管理運営が厳しくなる 224
 - ・運営への実質参加 165
 - ・研究の自由 134
- (図2を参照)

[問3] 新研究所の内部構成について

2. 構想素案の研究系・施設の部門配置

- ・原案でよい 162
- ・部門が多すぎる 59
- ・配置に問題 61 (関連して、図3参照)

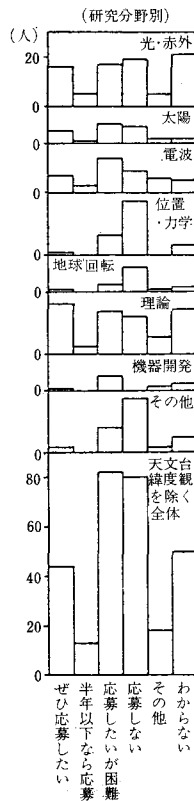
なお自由記述欄では、現状にとらわれすぎ(18)、流動性を確保せよ(12)などの意見がめだった。

3. 系や部門における定員配置 (図4参照)

- ・学問の発展を考慮した、思いきった配置 198
- ・共同利用関連重視 95
- ・現状をあまり変えない 40

図4に示した所属、年齢、分野別分布では、年齢に

図5 国内客員部門への応募の希望



よる差にくらべ所属、分野による意見の差が目立つ。

5. 国内客員部門について (図5参照)

- ・ぜひ応募 55, 半年以内なら応募 13, 応募したいが困難 89
- で、国内客員部門への期待の高さが示されている。分野別分布を図5に示した。

[問4] 共同利用に関する各委員会について

1・4・7. 各委員会の所外委員の選出法

表2および図6, 図7に各委員会所外委員の選出法についての回答を示す。

2・5・6. 専門委員会の性格・任務

○分野別専門委: 原案でよい 205, 系・施設に対応させる 45, 対応させない 23, 共同利用施設のみでよい 23.

○総合計画委: 所長の諮問機関 168, 実質的な調整決定 115, この種の委員会は不要 24.

○研究交流委: 国際共同研究事業の立案・組織, 国際研究交流の窓口, 国内研究交流の立案・組織.

[問5] 共同研究・国際協力について

1・2. 共同利用に関わる共同開発 (図8参照)

図 8 共同利用開発

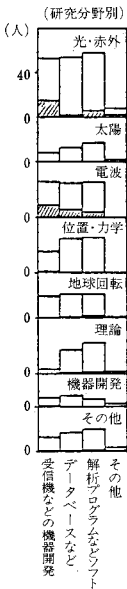


図 9 アトム型・モレキュール型

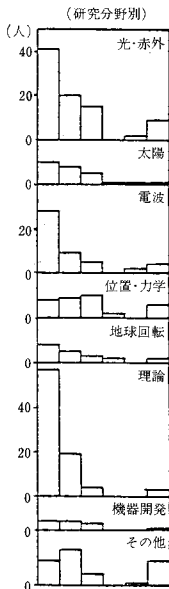


図 11 回答者にとっての研究上の支障 (4つの合計)

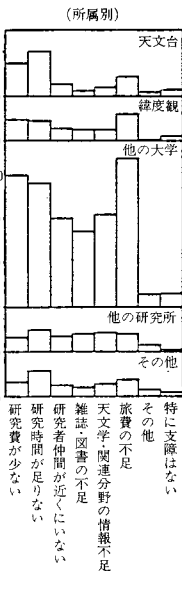


図 12 観測装置の利用

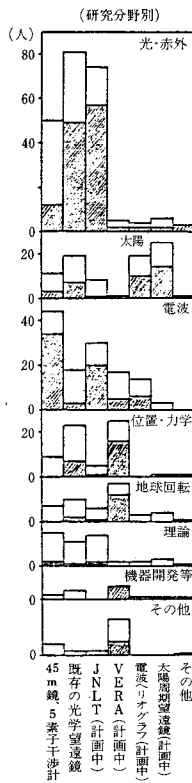


図 13 人事交流についてどう考えるか

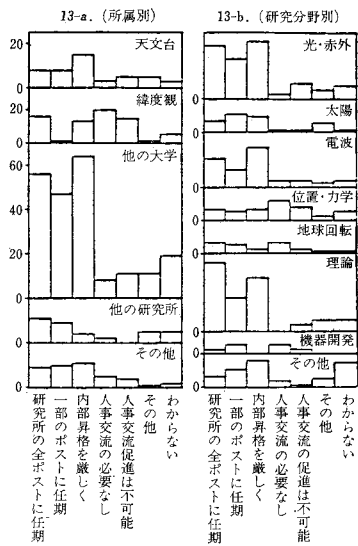


表 2

委員会	選出法	研究者の直接選挙	研究者組織間選挙	研連等の推薦	新しい研究者組織による選挙	その他
運営協議会		183	92	58		14
分野別専門委		151	84	19	79	8
総合計画/研究交流委		141	151	41		15

・具体策があり協力したい 64 件 (検出器・受信機 17, 解析ソフト 12, データベース 7)

・呼びかけがあれば考える 496 件 (解析ソフト 184, データベース 172, 機器開発 115)

研究分野別の分布を図 8 に示した。

3. 共同研究 (アトム型・モレキュール型) の利用

- ・積極的に利用したい 172
- ・利用はしないが必要 98

研究分野別の分布を図 9 に示した。

4・5. 国際交流の面で期待すること

- ・研究所外からも平等に参加 185
- ・外国旅費の充実に望む意見が、非常に多い (265)

〔問 6〕 共同利用運営について

1. 回答者にとっての研究上の支障 (回答 4 つの合計, 図 11)

- ・研究時間が足りない 205
- ・研究費が少ない 184
- ・旅費の不足 208
- ・研究仲間が身近にいない 126
- ・雑誌・図書の不足 108
- ・研究情報の不足 129

2. 観測装置の利用 (図 12 参照)

5. もし可能なら希望するサービス (ぜひのぞむと答えた人)

- ・電算機ネットワークの充実 181
- ・プレプリントなど新着文献情報 178
- ・論文等のコピーサービス

表 3

装 置	回 答	よ く 利 用	少 し は 利 用	殆 ど 利 用 し な い
45m 鏡・5 素子干渉計		51	93	170
既存の光学望遠鏡		69	101	170
大型光学赤学 (計画中)		83	59	171
VERA (計画中)		51	50	224
電波ヘリオグラフ (計画中)		20	25	271
太陽周期活動 tel. (計画中)		17	28	274
その他		7	2	38

ス 161 ○各大学における観測装置への援助 110

[問 7] 人事の交流について

1. 新研究所の人事 (図 13 参照)

○内部昇格厳しく 99 ○全ポストに任期 91
 ○一部ポストに任期 75. 以上合計で 275 人(67%)
 が、何等かの人事上の規制による人事交流促進を望んでいる。所属別、分野別の意見分布を図 13 に示した。人事交流についての自由記述は 126 人に達し、関心の高さを示している。

2. 新研究所の停年

○60 歳以下 31 ○60 歳 144 ○63 歳 138 ○63

歳以上 9

[問 8] 院生教育について

1. 院生教育の方式について

○受託学生 158, 併任方式 101, 総合研究大学院 74
 受託学生方式の支持が高いのは、地方大学からの参加を望む声が強いことに対応していると思われる。

2. 教育に関する期待 (自由記述)

113 人が記入している。研究の現場にふれること、東大以外の(私大を含む)院生への配慮の要望が目立った。(以上)

アンケートを見た感想

田原博人 (宇都宮大学教育学部)

アンケートの骨子は、改組の方針、各種委員会への意見、共同利用の内容と期待に関するものである。アンケート原案の作成に関わった一人として、回答結果は大体予想されるものであったが、これだけ多くの人から回収できるとは思っていなかった。改めて改組に関する関心の強さを感じている次第である。

さてアンケートについての一般的な分析は別のところにゆだね、ここではアンケートをみながら、印象に残った点を中心に私見を混えながら述べてみることにする。

新研究所への期待

まず新研究所に関する期待が非常に強いことである。国立研への移行は学問の正しい発展につながるのか、東大付置の共同利用として、大学の傘の下にいた方が良いのではないかと自問自答していた問題である。

こうした心配とは別に改組に多くの人から大きな期待が寄せられているのである。ところで期待は単なる改組

(移行)ではなく思いきった改革(新設)に向けられていることに注目しておく必要がある。回答者も現実には難しい問題であると理解しているが、期待を裏切らないでほしい。

モノポリー問題

モノポリーへの心配が非常に強いことも特徴的な点である。モノポリーを相対的なものあるいは格差とみると、新研究所が充実すればするほど、それが顕著になり、逆にたいした研究所でなければ心配ないことになる。マイナスの方向で問題を解決しようとは考えられないので、研究所も充実し、その結果所外での研究条件も向上していくことを目指すべきであろう。そのためにも、この機会に各大学が将来計画をもち、その実現に努力することが必要である。また新研究所はそれに即応した援助ができるよう工夫することが肝心だと思う。開かれた良きモノポリーを期待したい。

モノポリーとは言わないかもしれないが、予定されている各種の委員会が実質的なモノポリーにならないかという問題がある。アンケートではこのことは聞き出せなかったが、気になる点である。現実に各種の委員会に所